

<研究資料>

シニア世代によるボランティアグループの活動に関する研究
— 活動の現状と活性化に向けた課題を中心に —

長岡雅美¹

A study on the activity of volunteer groups for senior citizens
— Focusing on current situations and issues to invigorate activities —

Masami Nagaoka¹

Abstract

The purpose of this study was to clarify the current situation and examine issues to invigorate activities of the senior citizens volunteer. In this study, it implemented a questionnaire survey to participants of the senior citizens volunteer activities.

Concerning the issues of activities, they are “Consensus building”, “Individual problem”, “Activity environment”, “Activity practice”, “Positive participation awareness”, and “Group continuance and development”, which have been extracted. As a result, especially “Group continuance and development” and “Activity practice” have become the main problems. “Forming companionship to act together” and “Social evolution” are rated high as the important condition to vitalize activities, and also it is necessary to have company to share the same values and self-recognition that plays the role through the activities. This leads to the social acknowledgement that galvanizes the activities.

In addition, there are many preferable responses toward the direction of continuing group activities such as adding new members, however there are also a number of responses that prefer status quo.

These results indicate that there are issues on how the individual volunteer awareness to the activity and continuance of the group activity can be compatible.

1. 緒言

高齢者白書 2007 年版¹⁾によると、わが国の 65 歳以上の高齢者人口は、2006 年に過去最高の 2,660 万人（前年 2,567 万人）となった。今後さらに高齢化の進行が見込まれ、前例のない高齢社会の現出が予想される。

急速な高齢化が進展する中で、これからの高齢社会対策を考えると、単に寿命の延長だけでなく、健康寿命や活動余命の延伸が重要である。特に、退職後の生活設計には、健康問題と社会参加活動

を総合的に捉えることが課題である²⁾。

これらの課題に対し、高齢社会対策基本法（1995 年）では、高齢社会対策の具体的施策の一つとして「学習及び社会参加」を規定している。「学習及び社会参加」は、主体的行為を活性化し、生きがいの創出や生活の質（Quality of Life）の向上に直接貢献することが期待される活動である。

多様な社会参加活動があるなかで、特にボランティア活動は、「個人が自発的に決意・選択し、人間の持っている潜在能力や日常生活の質を高

1 武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科
Department of Psychology and Social Welfare, School of Letters, Mukogawa Women's University

め、人間相互の連帯感を高める活動である。」(1990. 世界ボランティア宣言)とされている。地域の中での一定の役割をもちながら、人々との交流を促し、自己実現を可能にするボランティア活動は、子育てが終わり、職業から退職したシニア世代^{註1)}にとって、非常に有意義なものであると考えられる。また、このようなボランティア活動の側面によってもたらされる多彩な人間関係や達成感は、レジャー・レクリエーション活動との関連性も高い。レクリエーションとは日々の生活の中に生きる楽しみと喜びを見出していくさまざまな活動を指し、それらは個人が主体的に選択できるものである。人はレクリエーション活動を通して、身体と心の健康を保ち、他人との交流を通じて社会的に健康な状態が実現できる。さらにレクリエーションは自己の可能性を広げ、生きがいづくりに貢献するものでもある。

シニア世代の生きがいが、他者との相互作用、人間関係づくりの過程を通して発見され、心身の健康をもって実感出来るものである³⁾とするならば、ボランティア活動はそれらの要素を含有するレクリエーション活動の1つであり、まさにシニア世代の余暇を充実させる有用な活動といえよう。

内閣府の「国民生活選好度調査」(2006)⁴⁾によると、ボランティア活動に積極的に参加したい人の割合は63.6%で、半数以上の人ボランティア活動への参加意欲を持っていることを示している。また、全国社会福祉協議会「全国ボランティア活動者実態調査」(2003)⁵⁾によれば、ボランティア活動者の年代は60歳以上が51.7%と最も多く、ついで50歳代27.6%、40歳代10.2%の順となっている。このように、ボランティア活動者は中高年がその大半を占め、年齢が上がるとともに、ボランティア活動への参加率が高まる傾向にある。今後、団塊世代の定年退職者の増大に伴い、シニア世代のボランティア活動は、ますます活発になるとと思われる。

ところで、ボランティア活動の形態は、個人で行う活動の他、グループやサークル(目的を同じくするボランティアの有志の集まり)、団体(会則や代表者が決まっており、事務局機能を持つなど組織としての形態が整っている集団)での活動

がある。中でもグループやサークルの場合、組織としての形態を整えるまでに至っていないことが多く、一旦立ち上がったグループも活動が滞るケースがあり、活動の発展や継続には、さまざまな阻害要因が存在すると思われる。シニア世代のボランティアグループも同様に、自身の健康問題や仲間の高齢化、家族の介護などの理由でメンバーがグループから離れ、グループとしての活動が継続できないケースが増えている。

これまで、シニアボランティアに関する研究は、ボランティアの活動状況⁵⁻⁹⁾や活動に対する意識、ボランティア活動が心身に及ぼす影響^{10) 11)}などについて行われている。しかしながら、これらの研究は、ボランティア個人の活動に焦点が当てられており、グループや団体の活動に着目した研究、あるいは活動形態と関連付けた個人の活動の実態や意識に関する研究はほとんどみられない。

シニア世代におけるボランティア活動をより一層拡充していくためには、ボランティア活動に対する個人のあり方はもちろんのこと、受け皿となる社会的なシステムを整備することも重要な課題である。先に述べたように、シニアボランティアのグループとしての活動は、この世代特有の問題を抱えており、その意味でも、個人のボランティア活動を支えるボランティアグループの現状を把握することの意義は大きい。

そこで本研究では、A市における地域福祉支援事業を事例とし、ボランティア活動実施者への調査を通して、シニア世代におけるボランティアグループの活動の現状を把握する。その上で、シニアボランティアグループの活動上の問題点や活動を活性化するための条件について考察し、社会参加を促進するための基礎資料を得ることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 調査の概要

1) 調査対象及び調査方法

調査対象者は、A市地域福祉支援事業において活動中のボランティアグループ(8グループ)の代表者および各グループのメンバーである。

本研究では、2段階にわたって調査を実施した。

1次調査は、ボランティアグループの実態を把握する目的で、各グループの代表者へのヒアリングを行った。2次調査は、1次調査の結果を踏まえて、グループとしての活動の問題点や課題を把握する目的で、各グループの構成メンバーであるボランティア個人を対象に、質問紙を用いた社会調査を実施した。対象とした8グループの各活動場所に直接訪問し、訪問日に活動をしているグループメンバーに調査を実施した。対象者に調査の主旨を説明し、同意を得た上で調査を実施した。調査票は、調査実施後に回収した。有効回答数は73名であった。

2) 調査期間

調査期間は、1次調査：平成19年3月20日から平成19年4月20日、2次調査：平成19年10月20日から平成19年10月31日である。

2. 調査内容及び分析方法

1次調査では、ボランティアグループの実態を把握するため、①ボランティアグループの活動年数、②ボランティアグループの構成員数③ボランティアグループ構成員数の動態④各グループの登録利用者数（各グループが行うプログラム提供の対象者を指す。）⑤グループとしての活動頻度の5項目によって構成した。

2次調査では、グループとしての活動の問題点や課題を把握するため、①ボランティア個人の特徴（性、年齢、活動年数、活動頻度、活動時間）、②ボランティアグループの活動上の問題点、③活動の活性化に重要となる条件、④ボランティアグループの活動の継続・活性化に向けた新メンバー加入についての4項目について調査を実施した。

分析においては、まず得られた結果を単純集計し、次に活動上の問題点について主因子法による因子分析を行った。分析ソフトはWindows版SPSS13.0を使用し、統計解析を行った。

3. 結果及び考察

(1) ボランティアグループの実態

最初に、対象としたA市と同市における地域福祉支援事業について概観しておきたい。

A市は、高度経済成長期にかけて重化学工業都市として繁栄し、農村地帯の住宅地化も進み急激に人口が増加している。しかし一方で、公害など

の都市問題が深刻化し、さらに経済構造変化による工業地の停滞、住宅地化の頭打ちが重なり、ピーク時には55.6万であった人口も、平成19年4月現在、約46万人となり、高齢化率は20%を超え、人口の減少や都市活力の停滞局面が続いている。

当該事業は、社会福祉協議会が中心となり、地域における福祉コミュニティの形成を図ることを目的に、小地域において住民が主体となつて行う、虚弱な高齢者等に対するさまざまな援助活動を支援するものである。事業開始から10年が経過し、現在は8地域8グループが事業に参加し、活動に取り組んでいる。ボランティアグループが提供するプログラムの対象者（同市に居住する介護保険対象外の虚弱な高齢者）に対しては、社会福祉協議会、民生委員、自治会等からの案内によって募集がなされ、希望者は各グループの「利用者」として登録されている。活動の頻度はグループによって異なるが、概ね週1～2回程度、自治会館など地域の施設を利用して健康維持や仲間づくりのためのレクリエーション活動、昼食の提供などを行っている。

表1は、各グループの活動年数、各グループの構成員数、各グループの登録利用者数（各グループが提供するプログラムの対象者を指す。これ以降は「利用者」と記述する。）、活動頻度をまとめたものである。8グループ中4グループが当該事業開始時から活動しており、最も新しいボランティアグループにおいても、5年以上活動を継続している。グループの構成員数をみると、8グループ中7グループが、10名以上で構成されており、そのうち2つは30名以上のグループであった。ボランティアグループ構成員数と利用者数の関係でみると、「グループ構成員数>利用者数」が3グループ、「グループ構成員数<利用者数」が4グループ、「グループ構成員数=利用者数」が1

表1 各グループの活動状況（平成18年度）

項目	グループ							
	A	B	C	D	E	F	G	H
活動年数(年)	10	10	10	9	9	8	6	10
ボランティア数(人)	37	11	28	20	31	24	22	8
利用者数(人)	15	19	28	43	18	14	84	52
活動頻度(回/1週)	2	1	1	2	2	2	2	2

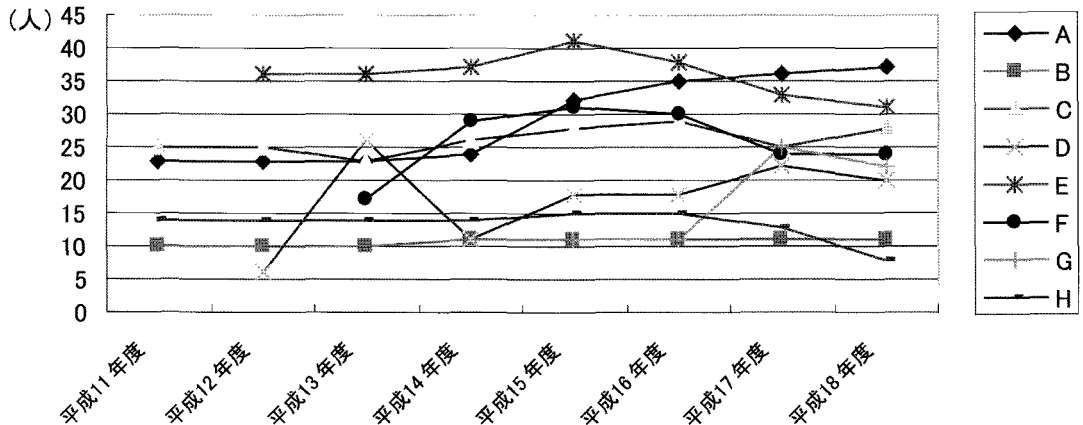


図1 グループごとのボランティア数の動態

グループであった。活動頻度は8グループ中6グループが週2回の活動であった。週1回活動のグループ代表者によると、活動回数は、ボランティア数や利用者数の問題ではなく、活動場所が確保できないという理由からであった。他の団体やグループと使用施設を共有しているため、活動を制限せざるを得ない状況にあるということであった。

図1は、各グループ(A~H)のボランティアグループ構成員数の動態について活動開始時から示したものである。各グループの動態をみると、グループによっては活動開始から2~3年間に人員数の変化がみられるが、それ以降は、いずれのグループも極端な増減はなく、グループによって規模の違いはあるものの、それぞれほぼ一定のボランティア数の構成を継続しているといえる。

(2) ボランティアグループの活動上の問題と課題

1) ボランティアグループの特徴

表2は、ボランティアグループの特徴を示したものである。当該事業において活動するボランティアグループは、男性メンバーがごく僅かで、本調査の対象はほぼ女性が占めることになった。この結果は、本調査固有の特徴ではなく、他の報告においても男性は女性に比べ、地域での活動に関心が薄いことが報告されている^{12) 13)}。女性は子育てや家事の過程で地域への接触機会が多いため、関心も高く地域への活動が比較的容易に始められるが、男性の多くが、退職前には地域と関わるのが少なく、退職後自分の活動の中心が地域に移っても、地域参加への足がかりがつかみにくいこ

とが指摘されている^{14) 16)}。年代別に見ると、60歳代が52.1%で最も多く、ついで70歳代27.4%、50歳代17.8%という順であった。当該事業のボランティアグループは、60歳以上のメンバーが8割近く占め、ボランティアグループの高齢化の傾向がみてとれる。本事業におけるボランティア活動の活動年数では5~10年未満56.2%、10年以上が13.7%で、本事業の開始当初から活動を継続

表2 ボランティアの特徴 (n=73)

項目		人数	(%)
性別	男性	4	5.5
	女性	69	94.5
年齢	50代	13	17.8
	60代	38	52.1
	70代	20	27.4
	80代	2	2.7
活動年数	1~2年未満	4	5.5
	2~5年未満	18	24.7
	5~10年未満	41	56.2
	10年以上	10	13.7
活動頻度	週2回	7	9.6
	週1回	25	34.2
	月2回	5	6.8
	月1回	12	16.4
	その他	24	32.9
活動時間(1回あたり)	1~2時間未満	6	8.2
	2~5時間未満	45	61.6
	5時間以上	22	30.1
活動に伴う支出額(1ヶ月)	無し	24	32.9
	500円未満	40	54.8
	500~1000円未満	7	9.6
	1000~3000円未満	1	1.4
	回答無し	1	1.4

している人が多い結果を示している。先に述べたボランティアグループの構成員数の動態にも大きな変化が見られなかったことから、各グループとも、活動開始時からほとんど同様のメンバーによって活動を継続していることが推察される。活動頻度は、週1回と回答した人が最も多かったが、「その他」と回答した自由記述には、2ヶ月に1回、あるいは3ヶ月に1回という活動頻度の少ない回答が目立った。活動時間では、1回あたり2～5時間未満が61.6%で最も多かった。シニア世代のボランティア活動として、どの程度の量が望ましいかについて、横断的研究ではボランティア活動に従事する時間と身体的健康度とは関連がないことが明らかにされている¹⁷⁾。縦断的研究では、ボランティア活動の活動時間が増えるほど生活満足度が高まるが、健康度自己評価は年間80～90時間の者が最も良好であるとしている¹⁸⁾。以上のように、健康に対する最も望ましいボランティア活動の量的水準については、一致した見解は示されていない。

2) ボランティアグループの活動上の問題

ここでは、ボランティアグループとしての活動上の問題点について把握するため、関連する26項目からなる設問を用意した。設問の設定に関しては、社会福祉法人全国社会福祉協議会が実施した全国ボランティア活動実施者調査(1998、2003)を参考に、対象とした事業、グループの特性等を踏まえ、活動の実状にあった項目を設定した。26項目の設問に対し、それぞれ「5：非常にあてはまる、4：まああてはまる、3：どちらともいえない、2：あまりあてはまらない、1：まったくあてはまらない」の5件法で回答を求め、因子分析(主因子法、バリマックス回転)により分類した。その結果、表3に示すように解釈可能な6因子を抽出した。

第1因子は役割分担の問題や、仲間との関係、活動における意思統一、問題が発生した際の相談相手など、活動方策に関するグループメンバー間の意思決定に係わる内容の項目から構成されていたことから、『合意形成』因子と命名した。第2因子は、体力的・年齢的負担、仕事・家事との両立、家族の理解など、個別の(個人的な)条件に係わる内容から構成されていたことから、『個別

課題』因子と命名した。第3因子は、活動場所、機器・機材、研修機会、資金、情報など、活動に必要なさまざまな環境整備に係わる内容から構成されていたことから、『活動環境』因子と命名した。第4因子は、活動中の事故(ボランティア・参加者)、活動における中心的存在の不足、プログラムのマンネリ化など、活動そのものに係わる内容から構成されていたことから、『活動実践』因子と命名した。第5因子は、社会的評価や活動意欲など、前向きな姿勢に価値を置く内容から構成されていたことから、『積極的関与意識』因子と命名した。第6因子は、ボランティアの高齢化、新規メンバーの未加入など、グループの今後の活動に係わる内容から構成されていたことから、『グループ継続・発展』因子と命名した。

図2は、先の因子分析の結果を踏まえ、各項目に対する「非常にあてはまる～まったくあてはまらない」のそれぞれの回答の比率を求めたものである。総じて、「グループ継続・発展」因子に関する項目、「活動実践」因子に関する項目で、「非常にあてはまる、まああてはまる」を合わせた回答が高い割合を示している結果となった。

3) 活動の活性化に求められる条件

ここでは、ボランティアグループの活動の活性化に重要となる条件について、7項目からなる設問を用意し、それぞれに対して「1：非常にあてはまる、2：まああてはまる、3：どちらともいえない、4：あまりあてはまらない、5：まったくあてはまらない」の5段階で回答を求めた。図3は、それぞれの回答の比率を求めたものである。グループの活動の活性化に重要な項目として「非常にあてはまる」と「まああてはまる」を合わせた回答が5割を超える項目は、「活動をとともに行う仲間づくり」(50.7%)、「社会的評価」(50.6%)であった。活動上の問題点と活性化の条件の両者の関係を見ると、グループ活動上の問題点の項目では、「仲間がいない」「活動が社会に評価されない」の項目で「あてはまる」と回答している割合は極めて低かった。言い換えれば、本研究で対象としたボランティアグループの活動においては、仲間の存在、社会的評価について満たされた状況であることを示していると言える。つまり彼らは、社会参加を促す鍵が、価値観を共有できる仲間の

表3 シニアボランティアグループの活動上の問題点

因子 項目	1 合意形成	2 個別課題	3 活動環境	4 活動実践	5 積極的 関与意識	6 グループ 継続・発展
役割分担が上手くいっていない	0.815	0.196	-0.101	0.046	0.050	-0.058
活動に対する考えがバラバラ	0.745	0.034	0.099	0.087	0.045	0.027
相談する相手がいない	0.722	0.090	0.031	0.091	0.068	0.004
人間関係が上手くいかない	0.623	0.102	0.166	0.021	0.116	0.017
地域との連携が上手くいっていない	0.597	0.380	0.264	0.039	-0.129	-0.104
仲間がいない	0.565	0.334	0.394	0.114	-0.076	0.050
能力が活かされていない	0.498	-0.030	0.219	0.129	0.316	-0.009
活動に意義が感じられない	0.368	0.065	0.073	-0.061	0.285	-0.057
体力的な負担が大きい	0.093	0.817	0.029	0.298	0.202	0.032
年齢的な負担が大きい	0.084	0.796	-0.179	0.240	0.326	0.017
仕事やパートとの両立が難しい	0.140	0.697	0.271	-0.026	-0.169	0.024
家事との両立が難しい	0.098	0.578	0.267	-0.055	-0.041	0.103
家族の理解が得られない	0.177	0.514	-0.083	0.079	-0.039	-0.118
活動場所が狭い	0.152	0.016	0.742	0.169	0.055	0.001
機材・機器を確保できない	0.142	0.217	0.738	0.045	0.275	0.108
研修機会が十分でない	0.179	-0.025	0.549	0.226	0.167	0.211
活動のための資金が不足している	0.033	-0.017	0.451	0.238	0.426	0.224
必要な情報を十分入手できない	0.383	0.147	0.398	-0.022	0.393	0.013
活動中のボランティアの事故	0.195	0.159	0.123	0.858	0.010	-0.013
活動中の参加者の事故	-0.021	0.121	0.176	0.762	0.088	0.131
活動の中心となる人がいない	0.024	0.124	0.066	0.400	0.386	0.330
活動内容がマンネリ化している	0.299	0.093	0.212	0.372	0.097	0.243
活動が社会に評価されない	0.046	0.114	0.428	0.042	0.603	-0.008
ボランティアの活動意欲が乏しい	0.368	-0.170	0.113	0.149	0.526	0.082
ボランティアの高齢化	-0.161	0.031	0.067	0.139	0.036	0.813
新しいボランティアが加入しない	0.060	-0.047	0.110	0.043	0.027	0.736
負荷量二乗和	3.782	2.884	2.576	2.008	1.656	1.548
寄与率	14.575	11.092	9.908	7.723	6.368	5.954

存在、活動を通じた自己の役割の明確化、さらにその活動の社会的評価であることを自らの活動を通して実感しているがゆえに、それらの項目を活動活性化の条件として選択したと推察できる。また、活動上の問題としてグループメンバーの高齢化、新しいメンバーの未加入の現状はグループのメンバー間において十分認識されていることが調査結果から明らかとなった。グループの存続、グループとしての活動の継続を考える上で、新たな仲間の加入は重要な課題であり、そのような背景から「活動をともに行う仲間づくり」が活性化の条件として上位の項目となったものと考えられる。

- 4) ボランティアグループ継続・活性化に向けた新メンバー加入について
当該事業は、すでに10年を迎える取り組みと

なっており、ボランティアメンバーの固定化、高齢化が進んでいるのは上述した通りである。さらに、グループ代表者からのヒアリングによると、提供プログラムのマンネリ化、ボランティアメンバーの高齢化などから活動の形骸化、停滞が著しいグループも見られた。このような状況に対して、当該事業を支援する社会福祉協議会はグループの存続、グループとしての活動の継続を考える上で、グループメンバーの加入が重要な課題の一つであると考えている。しかし、実際に活動するボランティアグループのメンバー自身は、新メンバーの加入についてどのように感じているのであろうか。

図4は、グループメンバー加入の是非に加え、新たなメンバーとどのようなスタイルで活動を行うのがよいかについて、グループメンバーの考え

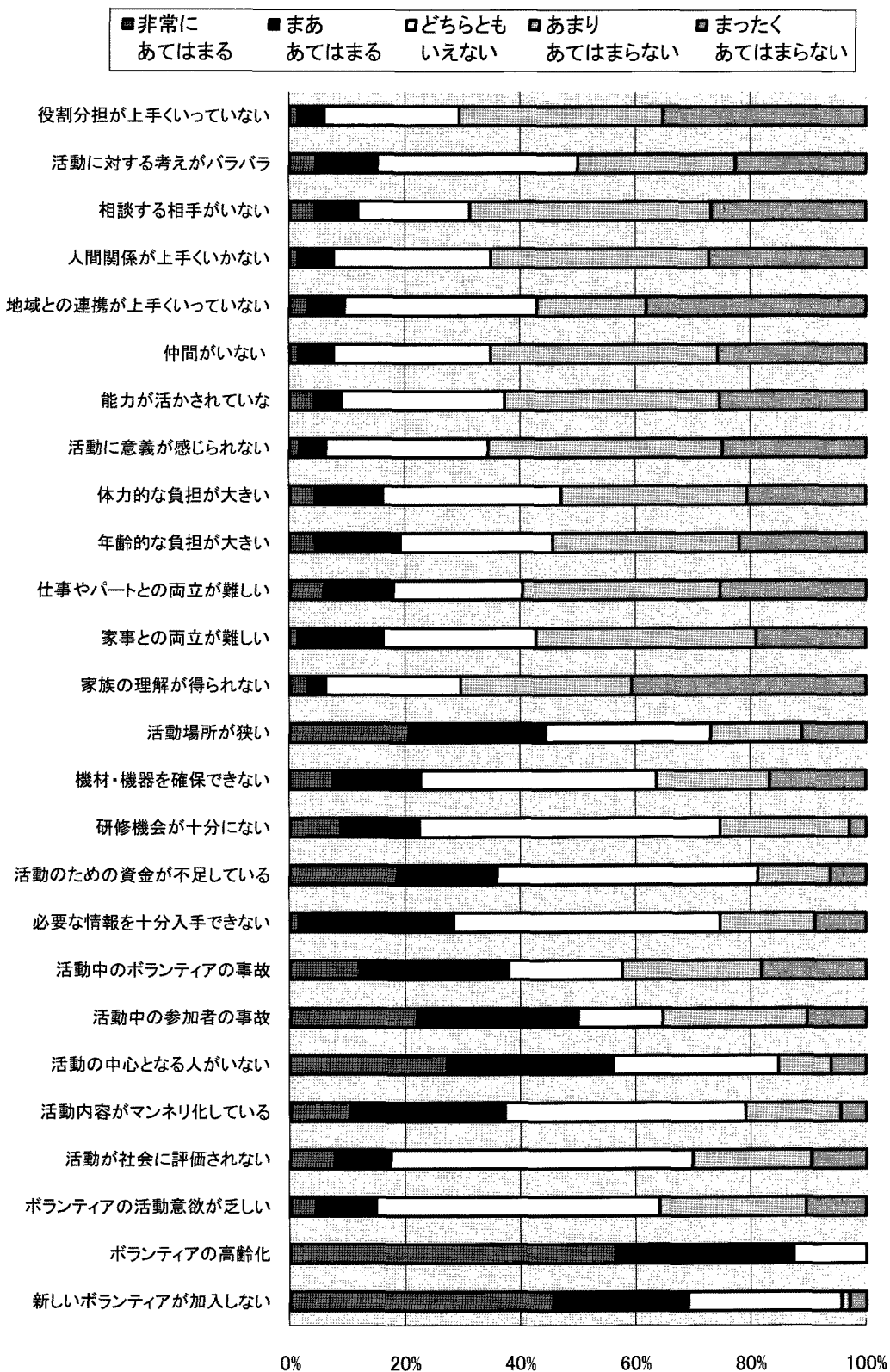


図2 グループ活動上の問題点

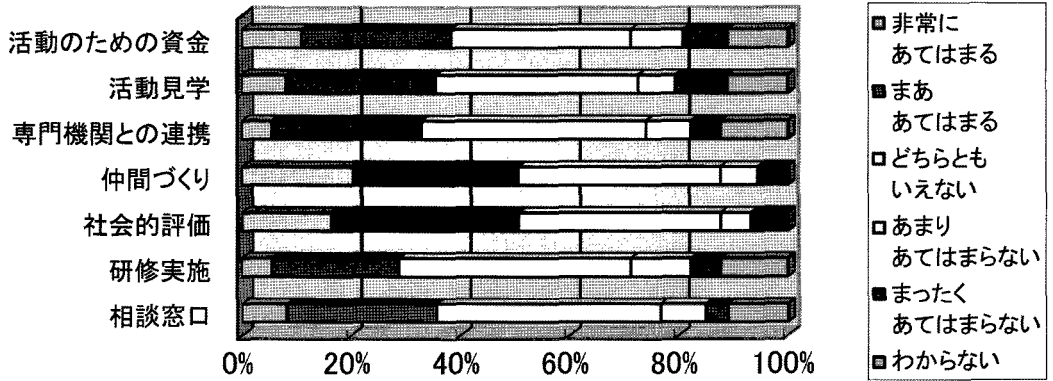


図3 活動活性化のための条件

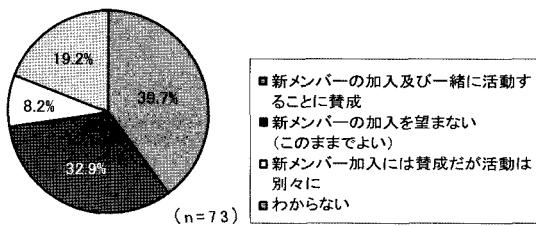


図4 グループ活動の継続・活性化に向けた新メンバー加入について

を示した結果である。「新メンバーの加入及び一緒に活動することに賛成である」が39.7%で最も多く、次いで「新メンバーの加入は望まない(今のままでよい)」が32.9%、「新メンバーの加入には賛成であるが、活動は別々にしたい。」が8.2%の順となった。新たなメンバーを補充しながら一緒に活動を継続していくことが望ましいとする回答が最も多かったものの、現状のままでよいとする回答も3割を超えている。また、自由記述の中に「メンバーの加入には賛成であるが、新しいメンバーのみでサブグループを構成するなどして別々に活動したい。」「メンバーが加入してもグループが出来上がってしまっているの、馴染めないのではないか。」というような意見も見られた。固定化されたメンバーによってもたらされたグループの連帯感と、疎通化された人間関係は、長期にわたる活動の継続を可能にした要因の1つでもあろうが、その一方で、新規メンバーの加入を考える際、それを抑制する方向に機能しかねない一面も合わせ持つことを伺わせる結果となった。活動上の問題点として新メンバー未加入の

状況を認識し、活性化の条件についても活動とともに伴う仲間づくりの重要性を考えていながら、それらが、必ずしも新メンバー加入を肯定する回答につながらないことを示す結果となった。ボランティア個人の活動、あるいは仲間に対する意識とグループとしての活動の継続において、どちらか一方ということではなく、双方がともに満たされていくことが重要であり、それらの両立をどのように図っていくかということが課題となることを示唆しているといえよう。

さらに、グループの人数規模別に新メンバー加入の是非、新メンバーとの活動スタイルに対する考えについて関係をみたところ、統計的にはグループの人数規模による回答には違いが認められなかった(表4)。つまり、新メンバー加入に対する考えは、グループの人数規模には関係がなく、必ずしも少人数のグループがメンバーの補充を望んでいるとは言えない。人数不足解消のための補充という観点からだけではなく、活動内容の充実に向けた取り組みとして、各グループの実状に合ったメンバーの補充とその後の活動スタイルを考えることの必要性が伺われる。

4. 結語

本研究では、シニアボランティアのグループとしての活動の現状を明らかにし、その問題点や活動を活性化するための条件について考察することを目的とした。

活動上の問題点に係わる項目を用いて主成分分析を行った結果、「合意形成」、「個別課題」、「活

表4 グループの人数規模と新メンバー加入希望の関係

グループ構成員数 新メンバー加入の是非	30名以上		15名以上 30名未満		15名未満		合計 人
	人	%	人	%	人	%	
新メンバーの加入に賛成	14	35%	11	47.8%	4	40%	29
新メンバーの加入を望まない (このままでよい)	3	7.5%	1	4.3%	2	20%	6
新メンバーの加入には賛成であるが 活動は別々にしたい	13	32.5%	7	30.4%	4	40%	24
わからない	10	25%	4	17.4%	0	0%	14
合計	40		23		10		73

$\chi^2 = 5.598$ $df = 6$ n.s.

動環境]、「活動実践」、「積極的関与意識」、「グループ継続・発展」の6つの構成要素を抽出した。そして、中でも「グループ継続・発展」に関する項目、「活動実践」に関する項目が、問題点として高い割合を示す結果となった。また、ボランティアグループの活動の活性化に重要となる条件については、「活動をともに行う仲間づくり」、「社会的評価」が上位を占める項目となった。さらに、グループ活動継続・活性化に向けた新メンバー加入については、新たなメンバーを補充しながら一緒に活動することに肯定的な回答が最も多かったものの、現状のままでよいとする回答も3割を超えており、ボランティア個人の活動に対する意識とグループとしての活動の継続において、それらの両立をどのように図っていくかということが課題となってくることを指し示す結果となった。さらに、新メンバー加入についてのグループメンバーの考えはグループの人数規模には関係なく、新メンバーの加入は、単に人数的な補充という観点からではなく、グループとしての活動内容の充実に向けた取り組みとして、各グループの実状に合ったメンバーの補充とその後の活動スタイルを考えることの必要性を示していると思われる。

最後に、本研究の限界と課題について述べておきたい。これまでの結果は、あくまでも特定の地域の事例を対象とした調査から得られたものであり、シニアボランティアグループ全体に一般化することはできない。また、グループメンバーのサンプル数が少なく、活動上の問題点や活性化の条件がグループの特性との関係において明言することができなかった。今後は活動内容やグループ規

模などとの関連、他の事例との比較において分析を深める必要がある。さらに、シニアボランティアグループ活動のより一層の拡充を図っていくためには、介入研究などを通して、活動を支える支援団体、行政組織との関係をどのように整えていくかなどの問題についても検討されるべき課題があると思われる。

註

註1) 国連の世界保健機構では「高齢者」を65歳以上とし、わが国の老人福祉法においても、65歳以上を「高齢者」と定めている。一方「シニア」は、広辞苑によれば年長者、先輩、上級生という意味をもち、年齢による明確な規定はされていない。本稿では、「シニア」における定義を、定年後を意識し始める年代、あるいは子育てが終わりに近づく年代を含め、会社などを中心とした社会生活、育児・教育などの子どもあるいは家庭を中心とした生活環境とは違う社会との関係の持ち方、家庭生活のあり方を再構築する年代とし、本研究の対象者については、単に年齢による区分に限定せず、法分野の示す「高齢者」ではなく、「シニア」の用語を用いることとする。

引用文献

- 1) 内閣府、2007年版高齢者白書：2-7、2007
- 2) 西田厚子・堀井とよみ・筒井裕子・平英美、自治体定年退職者の退職後の生活と健康の関連に関する実証研究、人間看護学研究4：

- 75-86、2006
- 3) 蘇珍伊・林暁淵・安壽山・岡田進一・白澤政和、大都市に居住している在宅高齢者の生きがい感に関連する要因、厚生学の指標 13 : 1-6、2004
 - 4) 内閣府国民生活局、平成 17 年度版国民生活選好度調査 : 23、2006
 - 5) 全国ボランティア活動振興センター、全国社会福祉協議会全国ボランティア活動実施者調査 : 105、2003
 - 6) 李 義明、高齢者ボランティア活動の質的影響と量的貢献の記述、兵庫県ヒューマンケア研究機構研究年年報 8 : 22-29、2002
 - 7) 松尾誠治郎、地域におけるネットワーク活動－民生委員と高齢者ボランティア（特集 活力ある高齢者像の構築－ゴールドプラン 21 にみるヤング・オールド作戦を展開する）、総合ケア 10 (9) : 38-43、2000
 - 8) 星野明子・桂俊樹・松谷さおり・成木弘子、地方都市における地域組織活動の効果に関する研究－自尊心・自己効力感・自己実現的価値尺度を用いた検討、日本農村医学会雑誌 49 (1) : 19-21、2000
 - 9) 日下菜穂子・篠置昭男、中年者のボランティア活動参加者の意義、老年社会科学 19 (2) : 151-159、1997
 - 10) 岡本秀明、高齢者のボランティア活動に関連する要因、厚生学の指標 53 (15) : 8-13、2006
 - 11) 藤原佳典・杉原陽子・新開省二、ボランティア活動が心身の健康に及ぼす影響：地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義、日本公衆衛生誌 52 (4) : 293-307、2005
 - 12) 藤原佳典、高齢者によるボランティア活動の意義と心身の健康に及ぼす影響－productivityとしての理論からの実践的課題へ、秋田県公衆衛生学雑誌 4 (1) : 12-20、2006
 - 13) 内閣府、平成 19 年度版国民生活白書－つながりが築く豊かな国民生活－ : 65、2007
 - 14) 蛭田道春、公民館における成人男子の事業（特集 地域活動と成人男性）、月刊公民館 525 : 4-10、2001
 - 15) 文部科学省、男性の家庭・地域活動でモデル事業－文部科学省、家事や育児で意識改革、厚生福祉 4980 : 3、2001
 - 16) 稲垣あきら、60 歳からの地域デビュー「楽熟会」のあゆみ、保健婦雑誌 58 : 680-685、2002
 - 17) Musick MA , Herzog R and House Js, Volunteering and mortality among older adults : finding from a national sample , J Gerontol 54B:173-180,1999
 - 18) Van Willigen M , Defferential benefits of volunteering across the life course, J Gerontol 55B:308-308,2000
- （ 受付 : 2007 年 12 月 1 日 ）
（ 受理 : 2008 年 10 月 2 日 ）